

文明の危機・文明災

—「令和」を生きる 「こころ」の処方箋—



徳島大学名誉教授 元副学長・理事（教育担当） **和田 眞**

はじめに —「文明災」を憂える

「もの豊かにして、こころ貧しき」の時代「平成」が終わった。物質欲と金銭欲の肥大化の時代、社会・人間環境の劣化の時代、科学・科学技術万能による弊害の時代、災害の時代など、実に激動の平成だった。元号「平成」の由来とは裏腹に、国内外共に理解不能な多くの出来事が惹起された。

何かを忘れ去ってしまった体たらくで、迷路に立ち竦むわが国は、これからの「令和」の時代、どこに向かうべきか、国民の一人ひとりが真剣に考えなければならない。政治、経済、行政など、社会の何かが崩壊しているように思うが、その崩壊の根底にある教育、学問、文化、文明、そして人間そのものの劣化が表出している。

人間が創った高度な文化「文明」により、人間の生活は格段に豊かになった。しかし、その文明の進歩による災害「文明災」が惹起されているようにも思う。そもそも「文明災」とは、本年1月12日に逝去された哲学者・梅原猛の言葉である。故梅原猛は、「今や我々は、天災、人災、文明災に曝されている」と言っているが、筆者は全く同じ思いである。

本稿では、激動の時代「平成」を、「文明災」の視点、主に科学・科学技術的見解から顧みて、その根底に流れる問題点を見詰めながら、今日のわが国の精神的・心理的意識、言わば「世相」を思慮したい。その反省の上に立ち、「令和」の時代を生き抜く道標、精神論と教育論、日本崩壊の危機を救う「こころの処方箋」を語りたい。「文明の危機・文明災」を凌駕するためにも。

原発事故は「文明災」それも「科学災」・「人災」

「地震・津波・原発事故」は、最も深刻な平成のキーワードだ。「地震大国・地震列島」日本、東日本大震災は未曾有の大災害、建物という建物が倒壊、多数の犠牲者が出た。未だに行方不明の親族の方を探し求める家族の皆さんの姿は、ノンフィクション作家・柳田邦男氏の言う「曖昧な喪失による悲嘆」を漂わせていて、戦争の時代とは異なる「死生観の時代」を迎えている。このことについては、改めて別のところで述べたい。

問題は、そうした事態だけにとどまらず、東京電力福島第一原子力発電所の原子炉がメルトダウン、原子炉建屋が吹き飛び、放射性物質が拡散、極めて重大な事故になってしまったことだ。原発事故直後、原子核物理学を専攻する筆者の友人は、いち早くメルトダウンを指摘したが、政府（菅内閣）がその事実を認めたのは、5月に入ってからだった。これは「人災」である。しかも、2013年（平成25年）9月に開催されたIOC総会で、安倍首相が、「原子力と汚染水は、『アンダーコントロール』と力説するに至っては、虚偽以外の何ものでもなく、政治家の倫理観はいったいどこに行ったのかと首を傾げたことを思い出す。

大地震、津波、原発制御不能に対して、政府や東京電力は「想定外」を口にした。しかし、筆者は、自然には計り知れない脅威があること、科学の粋を集めた原発であるが科学にも負の側面があること、科学をもってしても説明できないことが多くあることを正しく理解すれば、「想定外ではない」と感じた一人だった。「想定外」は、正しく怖がること

軽視されてきた結果だ。「ものを怖がらなさ過ぎたり、怖がり過ぎたりするのはやさしいが、正当に怖がることはなかなか難しい」。これは、物理学者で随筆家の寺田寅彦の言葉である。地震・津波は天災、予知もできず、どうにも防ぐことができないが、原発事故は、「文明災」・「科学災」・「人災」であり、避けられたかもしれない。

現在、わが国の原発は57基あり、高速増殖炉「もんじゅ」・「常陽」も含めると、全国に59基ある。

そのうち、現在9基が稼働している。国土の狭いわが国に、これだけの原発が存在すること自体異常だ。原発事故が悲惨な結果をもたらし、廃炉には気の遠くなるほどの費用と時間がかかることは、既にチェルノブイリ原子力発電所事故などで証明済みではないか。福島原発の廃炉も同じ道を辿っている。

原発は、わが国経済の成長戦略の一環として不可欠な科学技術であるとの理由から、稼働が再開され、しかも原発プラントの輸出を画策してきた政府や企業を見るにつけ、いったい政治家や企業人のモラルはどこに消え失せてしまったのかと愕然とする。本気になって原発廃止の方向に舵を切ってほしい。ところが、4月8日、経団連は原発の再稼働や新增設を真剣に推進すべきだとする政策提言を発表した。経済最優先の考え方に甚だ疑問を感じる。確かに、経済は重要だが、科学・科学技術の利用と人間や社会の未来を考える視点を持つべきだ。

政界や財界のトップに求められることは、「教養」・「哲学」・「思想」だ。

「エネルギー危機」に向けた

「令和」の科学・科学技術のあり方

未曾有かつ重大な原発事故は、科学・科学技術のあり方、ひいては教育のあり様を根本から考えさせられる出来事でもあった。科学・科学技術は誰の為にあるのか、その倫理とは何かを真剣に考えなければならない。

原発の問題を議論すると、必ず再生可能エネルギーの利用が持ち上がる。植物が光合成を行う過程で、水は酸素と水素に分解される。その水素と酸素

を使って電気エネルギーを獲得する仕組みが燃料電池である。燃料電池車が開発されているが、問題は水素の製造（現在は石油、天然ガスの分解）と運搬・貯蔵（建設費の高い水素ステーション）だ。無尽蔵の太陽光と無尽蔵の水を使って、ある種の触媒を用いて、常温常圧で簡単に水を酸素と水素に分解する方法を至急に開発する必要性を感じる。基礎的研究は行われているが、実用化には程遠い。水素と酸素が反応、電気が発生し水が生成する、水はまた簡単に水素と酸素に分解されれば、結局、水が循環するだけであるから究極の再生可能エネルギーだ。

福島原発事故を契機に、ドイツでは2022年までに原発を停止させるという。わが国は原発事故の当事国、それゆえ脱原発に向けて、今までの科学技術政策を転換すべきである。上記の水素と酸素の反応による電気エネルギー獲得のために、大学、研究機関、企業などの基礎研究と応用研究を政府が強力にバックアップする体制が不可欠だ。それはとりもなおさず科学・科学技術教育の転換を意味する。

反原発の主導的役割を担った故水戸巖（専門は原子核物理学、芝浦工業大学教授で市民活動家、昭和61年12月30日、双子の息子と激冬・難峰の剣岳で非業の死を遂げる、53歳）は、「原発は滅びゆく恐竜である」と言ったが、福島原発の大惨事はその予言どおりになった。「原子力 ムラ」という言葉が報道された。原発の推進を進めてきた学者、政治家、官僚、電力会社など、いわゆる利権を共にする共同体を指す。これらの人々は、テレビや新聞で結構勝手な意見を述べていた。一方で、原発の安全性に疑問を呈する学者などは、学会からも大学からも敬遠されて干されてきた。

どちらの側に立つかどうかは、思想、哲学、倫理観と関わってくるが、概して科学・科学技術分野では、知的好奇心が優先されてしまい、その学問・研究が、どこにどのように利用されるかを考えられずに、悪しき結果を招く場合がある。

当たり前だが、科学者も倫理観を持つべきである。倫理道徳的進歩を伴わない技術的進歩は人間を破壊に導く。時代は、学問・研究における人間の倫理を

厳しく問いただしている。社会に役立つ学問・研究という目先の効率論に惑わされてはいけぬ。科学・科学技術は、誰のためにあるのか、一人ひとりが考え、社会の大きな議論を呼び起こすことが求められる。

一方で、科学・科学技術だけではなく、人文・社会科学系分野についても考えなければならない。一般的に、人文・社会科学系分野は役に立たないと考えられがちだが、人間社会のことを考えれば極めて重要な分野である。世の中を動かすのは最終的には、哲学や思想だからだ。ただし、「原子力 ムラ」と同様に、権力に役立っているいわゆる御用学者もいることは事実だが。

「令和」時代の学問分野のあり方を述べたい。「理系の学生が、もし哲学や文学に表れる人間の感性から距離を置いたのでは、自然の真理の探究などできない。また、文系の学生が自然観のその時代への反映を抜きにして、人間の歴史は学べない」。これは、電磁気学の祖・マックスウェル（1831-1879）の言葉を簡略化したものだ。この言葉は、学生向けであるが、一般社会人への啓蒙でもある。理系分野にも文系の素養が必要な時代になっている。文系・理系の壁を越えて越境する「学問の融合」・「知の総合化」を急ぐ必要がある。

難しいことだが、精神文明と物質文明の連携・俯瞰・融合を目指した教育を推進すべきだ。そのような時代が到来することを切に願う。

化学物質による環境汚染は「文明災」・「人災」

『沈黙の春』(Silent Spring) は、1962年(昭和37年)に出版された故レイチェル・カーソンの著書である。DDT(残留性環境汚染物質のため製造禁止となり、消え去った農薬)を始めとする農薬などの化学物質の危険性を、鳥達が鳴かなくなった春という出来事を通し訴えた作品だ。1964年(昭和39年)に新潮社から初めて日本語に訳された際の題名は、『生と死の妙薬-自然均衡の破壊者(化学薬品)』だった。翻訳者は故青樹築一、本名は南原實(南原繁元東大総長の長男)で、ドイツ文学者、東大名誉教授

だ。ドイツ文学者が好くも翻訳したと感心させられるが、このタイトルは、「沈黙の春」よりも「文明災」を考えさせられる言葉になっている。

『沈黙の春』出版から34年、1996年(平成8年)、故シーア・コルボーン始め3氏の著書、『奪われし未来』(Our Stolen Future)が出版された。本書は、野生生物の減少をもたらした最大の原因は、外因性内分泌かく乱化学物質(いわゆる環境ホルモン)が後発的な生殖機能障害をもたらしたという仮説を提唱した。さらにそれが野生生物のみならず、人にも、男子の精子数の減少など生殖機能障害を引き起こしている可能性にも言及し、一大センセーションを引き起こした警告の書である。わが国では平成9年9月に訳本が発売され、大きな反響を呼び、日本国中が大騒ぎした。毎日のように環境ホルモンについての報道が新聞紙上を賑わした。その後、環境ホルモンについてはほとんど報道されていない。これはいったいどうしてなのか疑問である。『沈黙の春』と『奪われし未来』、この2冊の本は、重要なことを人類に投げかけている。

ごく最近、『ニューズウィーク日本版』(2019年3月5日号)に、「身近な化学物質が子供の健康を脅かす」と題する記事(ニューヨーク大学医学大学院教授レオナルド・トラサンデ氏執筆)が掲載された。

身の回りには多くの化学物質が溢れており、極めて快適な生活が保たれている一方で、危険な化学物質もあり、その使い方に注意を払う必要がある。これだけ、多くの化学物質が身の回りで使われているのに、一般の市民には分からないままである。今、問題視している化学物質の人体への影響は、急性毒性を持つものではない。50年後、100年後にどのような影響を及ぼすのか誰にも分からない。人類は、まさに人体実験を自らしているようだ。化学物質を使って初めてその危険性が分かったものはたくさんある。化学(有機合成化学)を専攻してきた人間として、その責任を痛感するので、機会があれば「化学物質の危機管理」について論じたい。化学物質による人体への影響、地球温暖化など地球環境問題は、悪さをすることをきちんと確かめずに使用してしまった人間による「人災」、文明の進歩による

災害「文明災」である。人間が創った文明のパラダイムシフトが求められている。

サリン事件は、「人災」・「教育災」

もう一つ、考えさせられる化学物質のことを述べたい。平成6年、平成7年に起こった松本サリン事件、地下鉄サリン事件のサリンだ。多数の死傷者が出た憎むべき大事件だった。サリンは農薬の開発研究の過程で見つかった液体の化学物質、神経毒の生物兵器として第二次世界大戦中、ドイツで量産、ソビエト連邦やアメリカでも造られたが、実際には使われなかった。近年、イラン・イラク戦争、シリア内戦などで使われた形跡がある。

この事件では、オウム真理教の幹部だった国立大学の化学を専攻した元死刑囚が中心となってサリンが合成され、使用されてしまった。さらに、サリンと同じタイプの神経毒物質VXまで合成し使用したのである。このサリン事件は、まさに「人災」である。この事件は、オウム真理教の教祖による、たまたま起こった狂気に満ちた犯罪では済まされないものがある。それは、オウム真理教の幹部の中に、学歴が高く自然科学を専攻した秀才が多くいたことだった。筆者には、宗教的なことは分からないが、決して知識人とは言えない教祖に高学歴の優秀な人材が何故ついて行ったのか甚だ疑問である。彼らが今まで受けた教育とはいったい何だったのか、ひいては日本の高等教育、科学教育は何をしてきたのかを考えさせられる。

故梅原猛は、「戦後教育がサリン事件を起こした」と言い切った。筆者も同感であるが、戦後教育の何が問題だったのか、簡単には言えない。戦後教育について、筆者は、本誌2018年Vol.44に「教育の危機管理—心底からの教育再生を目指して—」と題して拙文を書いたので参照していただきたい。戦後教育にも多くの責任があり、そのように考えるならば、オウム真理教によるサリン事件は間違った人材育成による災害「教育災」、「人災」である。

故水戸巖の「科学者は一番人間的でなければならぬ」の言葉を思い出す。すべての人間に当てはま

ることだが、特に科学を専攻する人間は、自分の研究や行動が他人あるいは社会に対し、どんな結果をもたらし、それが倫理的にどんな意味を持つのかを思慮するこころのゆとりを堅持することが不可欠である。オウム真理教の優秀な科学者たちに、このこころの余裕があればよかったと思う。

この問題は、20世紀が未解決のまま積み残した、科学と科学者が人間社会とどのように関わっていくべきかを問うている大きな課題でもある。このことは、「令和」の時代に入っても重要な問題であることは間違いない。科学者は、ただ、ひたすら真理探究のため研究に専念していれば人間の幸福につながるというのは、もはや幻想である。それでは、科学者はどうすればいいのか、科学者自身がごくありふれた「人の道」の意識を持ち、新しい時代に応じた倫理観を持つことである。そのような科学教育が必要であるが、現実の学校教育の現場では知識偏重の教育が相変わらず行われていることは悲しい。「教科を教えるのではなく、人間を教える教育」が必要だ。

人間の劣化による「人災」・「教育災」

平成の時代、中央省庁、企業、政治家、官僚の不祥事、異常な社会的事件など、極めて深刻な由々しき事態が多発した。紙面の都合上、詳細は割愛するが、すべて「人間の劣化」が絡んでいる「人災」だ。人間の劣化の起因はどこにあるのか思慮しなければならない。現在の日本のリーダー達は、紛れもなく、戦後教育を受けた人達である。筆者を含めて、戦後教育を受けた人間はひ弱、哲学や思想がなく、専門バカ、真の教養を持ち合わせていない。だから反知性主義や歴史修正主義の勃興に無力。戦後教育の過ちのつけがこのような不祥事となって表出している。教育の歪みによる教育による災害「教育災」だ。筆者は、『インテリジェンスレポート』（一般社団法人総合政策研究所）2018年9月号に、「社会に潜むリスクと諸般の劣化—日本崩壊の危機—」と題して拙文を書いたので参照していただきたい。

故司馬遼太郎は、彼の著書の中で「名こそ惜しけれ」という考え方が日本人の倫理規範の基になって

いと述べている。「自分という存在にかけて恥ずかしいことはできない」という意味であり、恥ずかしいこと、卑怯なことはやってはいけないという武士道の精神として、日本人のルーツとなり背景となる心の持ち方だという。江戸時代の会津藩の「仕(じゅう)の掟」の「ならぬことはならぬものです」の倫理観は今でも多くの人を持ち合わせているはずが、残念ながら名を惜しまない行為が目立つのはなぜだろうか。

受験戦争の中で、ひたすら偏差値を上げるレースにのみ汲々として、その試験の成績により、学歴により、将来の出世コースに乗れるかどうかが決まってしまうとすれば問題だ。人間力や人間性を鍛える機会がなくなっている教育現場であるとするれば、そこに大きなメスを入れなければならない。「学歴」ではなく、「学習歴」が重要だ。

情報技術による災害「情報技術災」

近年、IT、AIやロボット、自動運転車、スマートフォン、ネット、SNSの普及により、人と人との対話が圧倒的に減り、大人も子どももスマートフォン依存症にかかっている。これも「文明災」の一つで、強いて言えば「情報技術災」である。

ITはプラスのチョイスしかできないが、人間にはマイナスのチョイスもできる。マイナスのチョイスに実は重要なものが隠されている。ITを判断するのは人間、人間に気力がなくなるとITに任せるのでは問題だ。人とITのバランスをどうとるかが重要だ。

家庭、学校、職場、地域、一般社会で世代を超えた濃密な対話が求められる時代だ。昨今は、いつの間にか、科学・科学技術にコントロールされて(科学・科学技術による奴隷化)、人間の本来の生き方「しなやかな、ゆらぎの中で生きる」姿を失っている。「形式知」(文章、図表、数式などによって説明・表現できる知識)が先行し、「暗黙知」(言葉に表せない・説明できないもの)が置き去りにされていると言える。そう考えることは、人間に向けられた神からの警告だ。

静かに瞑想に耽りながら、「令和」の行く末を思慮する必要がある。科学・科学技術万能、超高齢多死社会の「令和」の時代を、「あるがまま」に生きる大切さを感じる。

医療による災害

「医療災」と「令和」の生き方「あるがまま」

近年、生物学、iPS細胞を始めとする生命科学、医学・医療の長足な進歩には目を見張るものがある。その恩恵を受けている一方で 医学・医療の分野にも「文明災」、「医療災」があるように思う。この「医療災」は、医療過誤、薬禍など、具体的な事例を指しているわけではない。

老化に伴い、免疫力の低下、遺伝子の変異、内臓機能の低下など避けることができない原因により、がん、心疾患、脳疾患などいわゆる3大成人病を発症する。これは、細菌やウイルスが体内に侵入することから起こる感染症とは明らかに異なる病である。

人間ドックもそうだが、病巣の早期発見・早期治療は、健康寿命や平均寿命を伸ばしてきたことは確かだ。だが、どんなに医学・医療が進歩しても、老化に伴う病気を制圧し、いくらでも平均寿命や健康寿命を伸ばすことができるとは思えない。人間の寿命はせいぜい百歳までだろう。若い人の病気の早期発見・早期治療は重要だが、ある年齢に達した人たちが病気を探し出すことに汲々としているのは、甚だ滑稽だ。何か変だ。老化は病気ではない、人間の宿命だ。近年の医学・医療による「延命治療」は、「医療災」と言っても過言ではない。

「あるがままに生きる」、日本で創始された神経質(症)の治療、「コペルニクスの転回」と言われた「森田療法」(元慈恵会医科大学教授森田正馬)がある。

「あるがまま」は、ただ単に自分の欲望に従って好きなように行動することではない。老いと病について森田療法は次のように教える。老いて病み、病んでまた老いる。そして、老いと病いの向こうには、死が厳然としてある。何人といえども、それを避けて通るわけにはいかない。そうであれば死をも「あるがまま」に認める以外にない。いたずらに死と死

後の不安に脅えるのではなく、その不安を生に転化して、「あるがまま」の「今」を充実して最期まで生き切ることがを勧める。森田療法は「死の恐怖から生の欲望への精神的エネルギー変換」を説く。人はどう生きてどう死を迎えたらいいのか、人生は不可解だ。人の死、人の魂とは何か、人それぞれの立場で死の考え方が違うが、立場を超えて「死の臨床」を考える必要がある。

死生学の学習は、医学教育や医療現場では不可欠だが、さらに欲を言えば、日本の普通の教育現場でも死生学の教育が求められる。わが国は、死生観の教育に乏しいように感じる。「生きることは死ぬこと」、「死ぬことは生きること」、人間は「生きる力と死ぬ力」を持つべきだ。「生の学び舎」と「死の学び舎」をつなぎ、「超高齢多死社会」にあって、より良い人生を生き抜くためにも。

今こそ、「あるがまま」に老いる、「森田療法」の出番だ。覚悟を持って一人ひとりが「生と死の縫合」、そのような文化を作ることが、「令和」の「超高齢多死社会」を生き抜く智慧だ。「Quality of Life」から「Quality of Death」への転換が求められる時代だ。言い過ぎかもしれないが、医学・医療による災害「医療災」を克服するためにも。

おわりに

— 「こころの時代・令和」を生きる智慧

経済一辺倒の平成の時代、わが国の社会構造の瓦解、はては人間のこころの崩壊に注意を払うべきであった。金満日本、欲望の資本主義の下、本当に我々国民のための政治経済が行われていたであろうか。「令和」の時代、今までの経済成長信仰の陰で何が惹き起されているのか思慮する必要がある。経済成長こそが人々を幸せにするという経済成長主義の価値観、成長への偏愛を捨て去る時が来ている。これ以上、豊かで便利な生活をしなくてもいいのではないか、むしろ昔の不便な生活に戻ることが肝要だ。とは言え戻れないのだが。

「不便益」という言葉がある。科学・科学技術の進歩により便利な生活を手に入れた我々だが、失う

ものも多くあった。車を捨て、バスを利用、歩くことを覚え、今まで見えなかった道端の景色が見え、しかも街行く人との会話が成立する。これも不便に伴うメリット「不便益」だ。

老子の思想に、「知足（足るを知る）」がある。あまりにも豊かになった生活、何でも欲しいものが手に入る時代、有難みが分からない。貧しいながらも豊かさを感じた時代もあったはずだ。

昭和と平成、わが国は「GDP＝国の豊かさ」をひたすら追い求めてきた。その結果、物がこれだけ溢れ、物質的には確かに豊かになったが、人の幸福感は高くなったであろうか。国連の関連団体が、国際幸福デーの3月20日に、「世界幸福度ランキング2019」を発表した。各国の国民に「どれくらい幸せと感じているか」を評価してもらった調査に加えて、GDP、平均余命、寛大さ、社会的支援、自由度、腐敗度といった要素を基に幸福度を計るそうだ。2019年は世界の156か国を対象に調査をした結果、日本は2018年の54位から4つ順位を下げ58位だった。経済成長至上主義をひたすら走り続けてきたわが国だが、GDPを始めとする経済指標などでは測れない目に見えない幸福の価値観を見直すべきだ。

現在のわが国には、「ぼーっと生きていられるらくちんな日本、とりあえず今、何とかなれば後は知らない」の世相がはびこっている。筆者もその一人であり、決して良いことではない。大宅壮一の言葉「テレビは日本を滅ぼす」、「一億総白痴」（差別用語になるが）を思い出してしまう。政治も世相も、将来を展望する大局的見解に乏しい。目先の事しか考えない。少子高齢化を考慮、成長を前提としない身の丈に合った社会に変革することが不可欠である。そのためにはどうすればいいのか、難しいことだが、人間の「こころ」、社会の「世相」を根底から変革することが必要だ。

新元号「令和」の出典は、日本最古の歌集「万葉集」の「梅花（うめのはな）の歌三十二首」の前書きとことだ。折角いただいた「令和」、「万葉集のこころ」をもう一度全国民が持とうではないか。安倍首相は談話で、「令和」という元号に込めた意味について、「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育

つ」と述べた。そうであるならば、そのような社会を目指すべきであるが、現実の社会は「こころの欠如」が進行し、逆行している。

現実の此岸のこの世で何が大事か、浮世離れした考え方だが、それは「こころ」だ。NHKのEテレビではないが、「令和」は「こころの時代」だ。筆者は人間のこころ・精神から一番遠い学問分野・化学を専攻してきた。その経験からすると、20世紀の科学技術・物質文明の長足な進歩の陰で忘れ去られてきた精神文明を取り戻すことが、21世紀、なかんずく「令和」を生き抜く我々の智慧かもしれないと思う。精神文明は「こころの文明」だ。

臨床心理学者・故河合隼雄は、よく「たましい」という言葉が使われたが、科学技術が飛躍的に進歩した20世紀を過ぎ、21世紀に入った今日なのに、今更「たましい」など古めかしい言葉を何故使われたのか、その理由を十分に考察する事が不可欠だ。「もともと『たましい』とは実体概念ではなく、極めて曖昧なものであるが、人間は『たましい』の作用、あるいは『たましい』の働きは体験する」と故河合隼雄は述べている。さらに、「デカルトによる物と心の切断について考えてみるとよい。デカルトの切断によって、すべてのことが明確になったが、それによって人間存在のもつ大切な何かが消え失せたのではないか。その大切な何かは『たましい』であり、デカルト的切断の明確さに対応するために、それは曖昧でなければならないのである」と言い切っている。柳田邦男氏は、「これはまさに要素還元主義を基軸とする近代・現代科学批判であり、21世紀批判であるといえよう」と言っている。要素還元主義とは、対象（全体）を要素（個）に還元し、細分化することにより全体を明らかにする近代科学の手法。化学を専攻してきた筆者は、上記の議論に全くもって同感である。

故梅原猛は、「自然との共生や循環という精神の教育、こころの在り方を教えるところが学校にも家庭にもなく、露骨な金銭欲、名誉欲、出世欲を満たそうとする政治家、人を殺すことを何とも思わない子ども。道徳の欠如が教育の欠陥だ。大人が自然破壊をやめて初めて教育になる」、「欧州は科学技術文

明をつくり、その限界を知っているから、環境保全を本気で考え始めた。日米はそれをもたらただけで限界を知らないので一番愚かだ」と言っている。誠に味わうべき言葉だ。物質文明の限界を知り、「精神文明の教育・こころの教育」が必要だ。

また、故梅原猛は、自然と人間が共生する「草木国土悉皆成仏」という仏教の教えを強く説いている。草木だけではなく、土や石にも命があり、すべてが仏になれるとの考え方だ。同じことを柳田邦男氏は、「石に言葉を教える。子どもたちにそういう時間を与える学校あるいは教師を出でよ。山川草木・花鳥風月の対象に、痛みの感情を持たせた俳句を詠むのを習慣化させるような授業をする教師は出てこないか」と言っている。これらは教育の原点であり、「令和」の時代に求められている「万葉集のこころ」だ

柳田邦男氏は、著書『この国の失敗の本質』（講談社）の中で、今の日本の状況を、「第2次敗戦」、「心の敗戦」と言っているが、筆者は全く同感である。「心の乱れ」が日本社会の隅々まで蔓延している。日本の危機といっても過言ではない。故梅原猛の著書『心の危機を救え—日本の教育が教えないもの—』（光文社）は、現在の世相を考える上で参考になる。

経済発展の陰で、何が起きているかをつぶさに見る眼差しを忘れてはいけない。わが国は、驚異的な復興を遂げ、金と物を獲得したが、得るものがあれば失うものもあるのが世の鉄則、何かを失ってしまった。それは、「こころ」だ、「精神性」と言ってもいい。その結果として、倫理観、道徳心の喪失が惹起されたように思う。筆者の口癖は、「日本は金や物で栄えても、こころで亡ぶ」だ。とは言え、日本人の心には、色々な問題を解決する手段として、1400年以上前の『聖徳太子の17条憲法』の精神、「和をもって貴しとなす」の精神が脈々と流れているはずだが。

わが国の世相の根底にあるものは、柳田邦男氏の言葉を借りれば、経済の発展に浮かれ、金や物に目が眩んだ「心のバブル化」だ。バブルは必ず弾ける。わが国が「心の敗戦」から再生するには、「心のバブル化」に気づくことだ。柳田邦男氏の言葉を噛みしめたい。